

研究ノート

日中における目連故事受容の特徴について
—『目連三世宝卷』と「富山の民謡」を例に—

磯 部 祐 子

富山大学人文科学研究第 85 号抜刷

2026 年 9 月

研究ノート

日中における目連故事受容の特徴について —『目連三世宝卷』と「富山の民謡」を例に—

磯 部 祐 子

1. はじめに

中国において、目連（日本表記は「蓮」と記するのが一般的である。）を主人公とした物語が演じられたのは、六朝の「仏説盂蘭盆経」に基づいた五代の豊かな故事性を備えた絵を見せながらの説唱体による語り物「目連変文」であり、明代にはその流れの下で、『目連三世宝卷』などの宝卷になっていく。また、演劇として舞台上でも、北宋「雜劇」、次代南宋の「戯文」、明代の「伝奇」として上演されたことはよく知られている。清朝の宮廷においても『勸善金科』として演じられた。

小稿では、近世から今日まで中国の民間でうたい継がれた宝卷における目連故事を日本における目蓮（日本の場合は「蓮」と記す）民謡と比較し、宗教性をもつ物語がどのような特徴を以て受容されていったかを考察する。対象となる目連関連宝卷は、本科研の主たる考察地域である江南で行われたものとする。一方、日本における目蓮民謡は、その史料的便宜性および豊富さ、そして宗教文化性の濃厚な点から富山県内で行われたものとする。

2. 江南の目連宝卷

まず、最初に、宝卷における目連故事の意味を明らかにするため、宝卷研究が盛んな地域の一つである江南・紹興に実在する宝卷テキスト全体（200種ほど）の現状について簡単に述べてみたい。その内容については、紹興の鍾小安の『紹興宣卷』に以下のような分類¹⁾が提示されている。すなわち、①宗教との関係が密接なもの、②紹興調腔などの伝統的な劇目と同一テーマのもの、③紹劇や越劇と同一テーマのもの、④彈詞や紹興詞調などの曲芸と同一テーマ、あるいは民間伝説や神話に基づくもの、⑤世俗の出来事をテーマにしたもの（相当の数におよぶ）である。今日の宝卷テキストが宗教性より世俗的テーマが多い傾向にある背景には、実際の上演には社会状況や文化的背景が大きく影響を及ぼすからであると思われる。

また、鍾氏の報告では、1949年以降の中国でもなお宗教性（迷信性と呼ぶ人もいる）の色濃いものとして（李世瑜の『宝卷綜録』²⁾などを参考をしていると思われる。）、海内外の元末

1) 鍾小安著『紹興宣卷』「第4章紹興宝卷の保存文本」（中国社会科学出版社、2014）pp.95-115。

2) 李世瑜編『宝卷綜録』（中華書局、1961）

明初以来の全ての宝巻1,500種、版本5000余をその内容と形式に従って以下の七種に分けている。①祝祷法事宝巻、②宣教勸善宝巻、③神通故事宝巻（仏教、道教、民間の諸神）、④婦女修行故事宝巻、⑤戯曲・説唱及び民間故事宝巻、⑥時事故事宝巻、⑦小巻（「まくら」に相当する）。目連宝巻は、そのうちの③神通故事宝巻にカテゴライズされ、最も広く行われたと記されている。

その目連故事の共通項について、ごく簡単に述べれば、目連が地獄に落ちた母を探しに行き困難の末に助け出す話といえる。しかし、母が地獄に落ちた理由、目連が地獄で目にした風景、目連が目にした此界及び地獄での具体的な苦海の様子等はテキストによって異同がある。

さて、宝巻のテキストで、目連の名字が冠せられている宝巻は、今のところ、『幽冥寶傳』『目連三世寶巻』があり、ともに早稲田大学の風陵文庫に収められている。前者『幽冥寶傳』は、「燕南胡思真重刊本（1898年）」と記されているように、北方を中心として用いられたテキストである。他方、『目連三世寶巻』には、風陵文庫所蔵「蘇城瑪瑙經房（1910年）」の他、「鎮江寶善堂刊本（1876年）」「常州樂善堂刊本（1886年）」「常州培本堂刊本（1886年）」「上海翼化堂善書坊刊本（1922年）」「上海宏大善書局石印本（1922年）」³⁾等各テキストがあり、いわゆる江南で広く行われたことが分かる。ほかに、『目連救母出離地獄昇天寶巻』等もあるが、早くから鄭振鐸氏などが「元末民初の写本」⁴⁾といい、近年では、車錫倫氏が「16世紀後期の宝巻」といい、「無為教およびその影響下の教派宗教教団の特徴を持つ」⁵⁾とされるように、清末のテキストとは大きく異なる。そのため、小稿では、比較対象の時代を考慮し、富山の目蓮民謡により近い文化的背景をもつ江南系の風陵文庫所蔵『目連三世寶巻』（以下、「目連三世宝巻」と記す。）を目連宝巻のテキストとして用いる。

一方、小稿で比較の対象とする日本における目蓮故事は、現存最古の目蓮説話『もくれんのさうし』（1531）をはじめ、今日まで、語られ、うたわれ、それに和して踊られてきたものが多々ある。その分布地も広く、隠岐、大分県、香川県、広島（備後）、或いは石川、富山など各地に伝承されている。その中で富山の目蓮民謡の論文として、吉川良和先生に南砺地域を中心とする「わが国目蓮物への血盆経浸潤初探」、「南砺系ちょんがれ目蓮盆踊り唄の詞章研究」、「チョンガレ系目蓮盆踊唄初攷」、「福光ちょんがれ保存会五十年のあゆみ」など⁶⁾があり、参考になる。

3) 車錫倫編『中國寶巻總目』（北京燕山出版社、2000）pp. 165-168。

4) 鄭振鐸『中國俗文學史』（商務印書館、1938）第十一章参照。

5) 車錫倫編『中国宝巻研究』第五編 宝巻漫録（広西師範大学出版社、2009）p496。

6) 「わが国目蓮物への血盆経浸潤初探」（人文学研究所報 No.61, 2019.3）。「南砺系ちょんがれ目蓮盆踊り唄の詞章研究」（人文学研究所報 No.62, 2019.9）。「チョンガレ系目蓮盆踊唄初攷」（一橋大学言語文化、41, 2004）。「福光ちょんがれ保存会五十年のあゆみ」（福光ちょんがれ保存会〔編〕刊（南砺市福光 7387）2018.11 月）など。

次章ではまず中国江南の目連宝卷の検討から比較考察の歩みを始めよう。

3. 「目連三世宝卷」について

3. 1 「目連三世宝卷」梗概

最初に、「目連三世宝卷」（上・中・下）の梗概を紹介する。

傳貝外とその妻・劉青提には子がなかった。ある日、門前に来た老和尚に大根を布施したが、和尚は食い終わると頓死した。やがて、和尚は劉青提に投胎して、目連が生まれる。劉青提は、もともと看經念仏に勤しんでいたが、弟の言葉に従い精進を解いて飲酒食肉にふけたため地獄に落ちる。そこで、目連は母を尋ねる旅に出て、靈山というところで仏祖に慈悲を願い、衣鉢と禪杖を授かる。それを以て多くの地獄を遍歴し、やっと母の居場所が阿鼻地獄であると知り、禪杖で獄門をたたくと亡者八百万が地獄から逃げ出した。そこで地藏菩薩は亡者を取り戻させるため目連を陽界に生まれ変わらせた（上巻）。目連は、塩商人・黄宗旦の息子黄巢に生まれ変わり、亡者八百万人を地獄に戻す（中巻）。その後、閻王の意見によって屠家・賀祥家に托生し、賀因という人物になる。賀因は修行して、目連の転生であることを悟り、地藏菩薩の許しを得て、阿鼻地獄（鉄圍城門）を開けて、母を救い出すことができた（下巻）。

以上が三巻からなる目連宝卷の大要であるが、巻毎に割かれた紙幅は、上巻三十九葉、中巻十葉、下巻十六葉と大きく異なり、上巻は地獄を遍歴するところに紙幅の多くが割かれている。

具体的内容は、傳貝外とその妻・劉青提の生活と二人が看經念仏に勤しむ日々を送っており、貝外は成仏し、目連は出家して僧になることから始まる。その後、目連の母は地獄に落ちて辛苦をなめるがその理由と地獄での悲惨な場面が次のように語られる。「母親破戒殺生靈 違背父亡遺囑言 信了舅爹狂妄話 將娘推在地獄門（母は戒めを破り、生き物の霊を殺め、亡き父の遺言に背き、舅^{おじ}のでたらめな言葉を信じて、自ら地獄の門へと身を投げ込んだ。）」（6葉）⁷⁾。それ故に、母劉氏は次のような禍に苛まれる。「劉氏青提起願未完，七孔流血，死在塵埃，被那鬼使，活揼活提，鉄索鎖着，牛頭押着，馬面打着，手扭脚撩，打得劉氏皮破肉爛，鮮血淋淋，**嚎啕**痛哭，真個傷情。（劉氏はまだ願いを言い終わらないうちに、七つの穴から血を流し、その場で息絶えた。そこへ地獄の使いが現れ、生きたまま捕らえて引きずり出し、鉄の鎖で縛り上げた。牛頭が押さえつけ、馬面が手足をねじり上げて打ち据えたので、劉氏の皮膚や肉は裂け、血がしたたり落ち、泣き叫ぶ声は痛ましく、まことに哀れな有様であった。）」（6葉）。

続いて母が血湖地獄を目にすることが描かれる。「上天無路，入地無門。到此時求生不得生，求死不得死。来到血湖池中，天色已晚。牛頭馬面身體困苦，皆要安歇。將劉氏提到血池邊，望下一**丟**，紅浪滔天，淹頭頂**嚎啕**痛哭一場。看見池中些婦人都是赤身露體，身上浸得皮開肉爛。（天

7) 以下、「目連三世寶卷」の原文を引用するときは、該当部分を（ 葉）の形で示す。

に昇ろうにも道はなく、地に潜ろうにも門はない。この時に至っては、生きようとしても生きられず死のうとしても死ねない。血の池へとたどり着いた時には、すでに日も暮れていた。牛頭馬面も疲れ果て、休まねばならない。劉氏は血の池のほとりに連れて来られ、下をのぞき込むと、真っ赤な波が天を衝くほど逆巻き、その光景に頭から足の先まで浸されるようで、声をあげて泣き崩れた。池の中には何人もの女がいて、皆、裸のままの姿で、その身体は血の池に浸され、皮膚が裂け、肉がただれていた。）」(6葉)。

母はその様子を目にして、「我等不知犯何等罪過 坐在血湖池内受苦（私たちは、いったいどんな罪を犯し、血の池に座らされこのような苦しみを受けねばならないのか、まったく分からない。）」と漏らす。その時その池にいた女たちはその原因を語る。「未曾満月堂前過 觸汚宗祖與家堂 未曾満月厨房過 觸汚竈君過往神 未曾満月河邊洗 觸汚水府海龍王 又將不潔衣裳曬 觸汚天堂日月光（満月の夜でないのに堂の前を通れば、宗祖や家堂を穢してしまう。満月の夜でもないのに厨房を通れば、竈の神やそこに宿る過去の神々を穢してしまう。満月の夜でもないのに川辺で洗濯をすれば、その汚れは水府（海の宮殿）に住む龍王を汚してしまう。さらに、不浄な衣服を干せば、その穢れは天界に届き日月の光をも汚してしまう。）」(6葉)と。

ここには、宝巻でよくうたわれる「不浄行為が天地・神仏にまで影響する」という戒めの言葉があり、女性一般に対する受苦の原因が示される。これは、宝巻の上演、すなわち、宣巻の聞き手が主に女性であったことから、女性たちの関心を引き寄せるための警句であったろう。ただ、血湖地獄が果たして女の地獄かと言えば、「此是血汚池、凡人在世、不問男女、不務正道、多貪酒色財氣、死後罰在池中受苦（ここは血汚池である。人がこの世にいる間、男女を問わず、正しい道を行わず、酒・色欲・財欲・怒りに溺れた者は、死後この池に落とされ、苦しみを受ける。）」(22葉)と記されるように、決して女だけが陥るものではなかった。

その後、目連が登場し母を求めて地獄巡りに旅立ち、宝巻によくみられる地獄巡りの様子がうたわれ、各地獄、すなわち「鬼門關」「孽鏡臺」「破錢山」「剥衣亭」「寒氷池」「神鷄山」「油鍋地獄」「滑油山」「枉死城」「鋸解」「刀山」「鉄板地獄」「惡犬地獄」「碓舂地獄」「炮烙」「挨磨」「孟婆莊」「奈何橋」などで苦しむ人々の様子とその理由が述べられる。

次の項では、後に富山の目蓮民謡と比較するために、「目連三世宝巻」における地獄遍歴がどのように描かれているか列挙して訳出する。

3.2 詳細な地獄描写

まずは、登場順に、「鬼門關」から見ていこう。

・「鬼門關」(17葉) 鬼門關上冷凄凄 獨自孤單無所依 拋却家鄉兒共女 別離枕上妾和妻 眼中泣血千般惱 腹內回腸九曲悲 多少花朋酒友輩 今朝到此各支離（鬼門が閉ざされ、冷たく寂しい。独りぼっちで頼る者もない。故郷も子どもたちも捨て、枕を共にした愛しい妻や妾とも別れ、目には血の涙があふれるほどの悩み、胸の内は腸がねじれるような深い悲しみに満ち

ている。かつては花を愛で酒を酌み交わした友も多かったが、今朝ここでは、皆それぞれ散り散りになる。)

・「孽鏡臺」(17-19葉) 孽鏡臺鏡高懸照人一世 善與惡功與過不差豪分…作惡的鎖上臺看他孽障 世上人作惡事日久月深 第一種忤逆子雙親不敬 兄與弟眞骨肉視若傍人…罪過小人四生胎卵濕化 孽障重下地獄永不翻身(孽鏡台の鏡は高く掲げられ、人の一生を照らし出す。善行も悪行も、功績も過ちも、ほんのわずかな違いも見逃されることはない。…悪事を働いた者は孽鏡台に縛られ、その罪業が明らかにされる。世の中の人々が悪事を重ねれば、その報いは必ずやってくる。第一に、親に逆らい不孝を尽くすのは子の大きな罪だ。兄弟という血を分けた者同士がまるで他人のように冷たく接するのもまた罪。…死後に四つの生まれ方(胎生・卵生・湿生・化生)を経て、重い罪業を背負い、地獄に堕ちて永遠に救われることはない。)

・「破銭山」(18葉) 破銭山有萬丈高 鬼魂到此哭嗷嗷 饒君化積千張紙 罪孽難消半纖毫 陰司若受錢和鈔 貧者俱亡富可逃 地獄無邊苦海境 還須功德培為高 (破銭山は万丈の高さで、亡魂たちはそこに来ると泣き叫ぶ。紙銭千束を焼いて供えようが、罪は少しも消えない。冥界が本当に金や紙銭を受け取るのなら、貧しい者は皆滅び、金持ちだけが逃れ得る。地獄は果てしなく、苦しみの海のような世界。そこから抜け出すには、功德を積むことこそが最善だ。)

・「剥衣亭」(19葉) 剥衣亭裡怨魂魔 冤冤相報沒差訛 罰他陽間為畜物 也是前身作惡多 不敢惹人偏要捉 剥皮斷足痛如何 今在亭中相等你 剥下衣皮也不過(剥衣亭には恨みの亡魂が集まり、怨みは怨みで返され少しの誤差もない。陽の世界で畜生として罰を受けるのは生前の悪行が多かった者。人を怒らせるつもりがなくとも、捕らえられれば皮を剥がれ足を断たれるがどんな痛みか。今、この亭でお前を待っている。衣の皮を剥がれることなど序の口だ。)

・「寒氷地獄」(19葉) 寒氷地内冷氣侵 不惜衣裳必到臨 自己身穿美麗服 布衣不着父母身 有錢驕吝難施捨 不做衣裳濟困貧 決水旱淹並放火 此種罪孽入寒水(寒氷地獄の中は冷氣が身にしみる。衣服を惜しんで施すことをしなかった者は必ずここへ落ちてくる。自らは美しい衣を着ていながら、布の衣一枚すら両親に着せようとせず、金があっても驕って吝嗇で施しをせず、貧しい者に衣を作って助けることもしなかった。さらに、堤防を決壊させたり、干ばつで人を苦しめたり、火を放ったりした者は、その罪によって寒氷地獄に堕ちるのだ。)

・「神鷄山」(20葉) 神鷄山下路途岐 鉄嘴雄鷄世所奇 專吃人間窺女眼 單叨世上看郎眉 淫詞賭博貪看要 地理不明慣相欺 此輩人兒歸地府 罰他双目不能窺(神鷄山のふもとには分かれ道があり、鉄の嘴を持つ雄鷄という、世にも珍しいものがある。それは、俗世の欲に偏り女の姿を覗き見るのが好きな者、或いは男の眉ばかりを眺めていた者。淫らな言葉を口にし、賭博にふけり、人をからかい見物するのを好み、その地の道理もわきまえず、人を欺く者ら。こうした連中は死後に、地府へ落ち、罰として両目を奪われ、覗き見ることはできなくなる。)

・「變畜受刀割之報」(21葉) 為人死後變諸牲 総為生前結下因 食禄不忠還酷虐 欠糧頼

債利過身 損人利己多瞞昧 不肯持齋戒殺生 罰他此處為畜類 報應分明理最眞（人は死後、さまざまな家畜に生まれ変わる。それはすべて生前に結んだ因の結果である。俸禄を受けながら忠義を尽くさず残酷なことをする。糧を受けておきながら借金を返さず利を貪る。人を損なって自分だけ利益を得ようとし、欺き隠すことが多く、齋戒を守らず殺生をやめようとししない。そこでその罰として、この世で畜生の身に変わる。報いは明らか、因果の理は最も正しい。）

・「油鍋地獄」(22葉) 只為生前作孽多 今朝不免下油鍋 口中香美滋膏味 都是猪羊鷄鴨鵝 在世烹他雖適口 陰間炙己待如何 為人不可犯葷腥味 死後都歸安樂窩（生きている間に罪を犯せば、死後には油鍋に落ちるのは必至。おいしいのは、どれも豚や羊、鶏、鴨、ガチョウの肉。料理して食べる時は美味しく感じても、あの世では自分が焼かれる番になったらどうするか。人として肉食を避ければ、死後は安らぎの住処へ帰ることができるのに。）

・「血湖池」(22葉) 惟有人人造孽多 不修品行念彌陀 多貪酒色並財氣 不孝父母逆公婆（人生で罪を多く作り、品行を正さず阿弥陀仏を念じることせず、酒や色欲、財産や名誉に貪りつき、父母に孝行せず、舅姑にも逆らう人が陥るのだ。）

・「滑油山」(24葉) 滑油山上滑難行 只為生前意不平 不肯修橋並補路 吝財不捨路燈明 墳山掘還掘路 神鬼空中看得清 待到魂兒歸地府 滑油山上使長征（滑油山は滑って登りにくい。それもみな、生きていた頃の恨みや不満のせいなのだ。橋を修理したり道を整えたりすることをせず、お金を惜しんで街灯すらつけようとしなかった。墓のある山を掘り返してまで道を作ろうとしたが、神や霊たちは空からその様子をしかと見た。亡魂が地獄に戻ってくれば、滑油山を長い行軍のように歩かされるのだ。）

・「枉死城」(25葉) 枉死城中孽障深 為因連累命歸陰 冤仇報應分明白 纔見閻羅法律森 若是忠臣並孝子 死後立刻即為神 免得城中來住息 見得陰司報應分（枉死城には、罪深い者たちが集まる。他人を巻き込んで命を落とした者は死後に陰間へと引き込まれる。冤罪や恨みの報いははっきりと裁かれ、閻魔大王の厳格な裁きが目の前に現れる。もしその者が忠義に厚く親孝行であったなら、死後すぐに神として祀られる。そうすれば、枉死城に住むこともなく、陰間での報いを目の当たりにすることもない。）

・「鋸解刑」(26葉) 鋸解刑罰痛傷心 鋸得陽間不正人 敬神演戲歌春曲 男女觀之惑惑深 守節不終重改嫁 將他一鋸兩開分 要知能免鋸解苦 莫說姦邪淫慾情（鋸で引き裂かれる刑罰は心も痛めるほどの苦しみ。この刑罰を受けるのはこの世で不正を働いた者。神を敬うふりをして芝居や色事にふける者。それらを見た男女は心を惑わされ深く感化される。節操を守らず再婚を繰り返す者。そのような者は鋸で真っ二つに引き裂かれる。この鋸の苦しみを免れたいなら、姦通・邪淫の欲望を語ることは止めよ。）

・「拔舌抽腸」(27葉) 世間造孽皆由口 黑白眞偽信口言 誹謗善良兼誘騙 抽腸拔舌理當然 自称師祖將人惑 更作孤僧野道禪 採戰鉛丹成淫慾 發到開膛剖腹泉（世の中の罪はみな

口から生まれる。善悪や真偽をわきまえず、思いつきで物を言う。善良な人を誹謗中傷し、へつらいで人を惑わせる。そのような者が腸や舌を引き抜かれるのは当然の報いだ。自らを師や祖と称して人を惑わせ、さらに孤僧として正道を外れた禅を説く。怪しげな鉛丹を用いて、淫らな欲望をかき立てる術を使い、ついには腹を裂かれて地獄の泉に堕ちることになる。)

・「鉄板地獄」(27・28葉) 鉄板地獄痛傷心 榨得陽間女婦人 貪淫不得生兒女 還妒丈夫娶妾身 宗祀不承為不孝 故到陰司受此刑 要免陰司榨壓苦 除驅妒嫉早修心 (鉄板地獄の責め苦は痛ましい。そこでは、女らが、体を搾られるような刑を受ける。色欲に溺れ子も授かれず、そのうえ夫が妾を迎えると嫉妬する。家の祭祀を絶やし不孝を招き、ゆえに冥界でこの刑を受ける。この地獄の压榨の苦しみを免れたいなら、嫉妬の心を捨てて早く心を修めるほかはない。)

・「刀山地獄」(28葉) 刀山地獄苦難當 專戳陽間刁滑人 賣假東西欺呆漢 陰謀暗算婦人身 千般機巧傾房產 萬惡奸刁害寡貧 如此鬼魂來冥府 刀山斷要受艱辛 (刀山地獄はこの上なく苦しい。生前に狡猾で人を欺いた者らが、刀の山に突き刺される。偽物の商品を売って愚かな人をだまし、陰で策略を巡らして女性を陥れる。あらゆる奸計を使って他人の財産を奪い、あらゆる悪事で未亡人や貧しい者を苦しめた。このような魂は冥府に送られ、決まって刀山の苦しみを受けることになる。)

・「惡犬地獄」(28葉) 惡犬生來似虎形 張牙無爪向他奔 在生昧理驚天地 只想偷情結私恩 拆散婚姻罪孽重 聖賢字跡不思存 鬼魂從此來經過 惡犬將他一口吞 (冥界の犬は生まれながらに虎のような恐ろしい姿だ。牙をむき出しにして、爪もないのに人に向かって襲いかかる。生きている間に道理をわきまえず天地をも驚かすような行いをし、密かに情を盗み私的な関係を結ぼうとする。他人の夫婦関係を壊すことは極めて重い罪だ。聖人や賢人の教えを顧みない。そのような亡魂はここを経て、惡犬に一口で飲み込まれてしまう。)

・「碓舂地獄」(29葉) 碓舂地獄有前因 報應分明確是真 掘墓盜屍兼合藥 不憐父母當途人 再加謗毀佈施者 不信修心清淨身 如此鬼魂歸地府 碓他如米一般新 (石臼地獄にはそれに至る前世の因縁がある。その報いは明白で、紛れもない真実。墓を掘り死体を盗み、それを利用して薬を調合する者。父母や道で出会った人々に情けをかけない者。さらに、善行や布施をする人を誹謗中傷する者。信仰を持たず、心を修めず、身を清めない者。このような人間は、亡魂となり地獄へ送られ、石臼で米のようにすり潰される。)

・「炮烙之刑」(29葉) 炮烙之刑慘異常 活身綁柱骨焦黃 生前炙物貪香味 死後將君烙備嘗 暗破人齋增罪孽 善言不信罪難當 欲消死後刑炮烙⁸⁾ 早惜生靈進佛堂 (炮烙の刑は極

8) この刑罰の由来は、中国殷王朝末期の暴君・紂王と、その寵姫・妲己にまつわる伝説。あるとき、妲己は「人間を焼いたらどんな匂いがするのか知りたい」と言い、紂王に命じて「炮烙の刑」を作らせたと言われる。

めて残酷。生きたまま柱に縛られ骨まで焼け焦げて黄色くなる。生きているうちは焼き物の香ばしさを貪り、死んでからはその人自身が焼かれてその味を提供する。人の精進を密かに破れば罪はさらに重くなる。善き言葉を信じなければその罪は免れがたい。死後、炮烙の刑を免れたければ、早く命を大切に、仏の教えに帰依することだ。)

・「挨磨地獄」(30葉) 挨磨地獄苦難當 罪鬼臨之已斷腸 在世妄為非禮事 陰司半點不能藏 將身倒放在磨眼 皮肉如漿骨似霜 欲免陰間磨上苦 持齋念佛效忠良 (挨磨地獄の苦しみは計り知れない。罪を犯した亡魂がそこに落ちれば、腸が断ち切られるほど苦しい。生きている間に妄りに礼を欠けば、死後、冥界では僅かも見逃されることはない。罪人は身体を逆さにされ石臼の中に放り込まれ、皮膚と肉は潰れて液体となり骨は霜のように碎ける。もし冥界でこの石臼の苦しみを免れたいならば、現世において精進し仏を念じ、忠良を尽すことだ。)

・「孟婆莊」(30葉) 陰司設立孟婆莊 專造迷魂大補湯 根行深厚靈性在 便来此地有何妨 如其自誤未修者 只怕終歸地獄藏 犯罪孤魂解到此 罰他飲過見閻王 (冥界には孟婆莊という所があり、そこでは亡魂を惑わせる迷魂湯が特別に作られている。もし修行を積み根本がしっかりし靈性が高ければ、この地に来て恐れることはない。だが、自らを誤り修行を怠った者は、地獄に落ちることを恐れる。罪を犯した孤独な亡魂がここに着けば、罰としてその湯を飲まされ、閻魔大王の前に引き出される。)

・「奈何橋」(31葉) 奈何橋上判分明 只為生前枉惜金 貪花貪財難停刻 為子為孫錯光陰 造成惡業冥來報 積下深仇橋底沈 惡物毒蛇亂吞搶 魚蝦蟹螯當路經 孝子忠良先接引 功高德厚鬼恭欽 或送西方去安享 也有樂善再修行 心明似鏡魔難我 性定如山孽不尋 寄語陽間未來鬼 莫臨此地受冤擒 (奈何橋の上では、すべての善悪が裁かれる。生前に金銭を惜しみ、色欲や財産に執着し片時も手放さず、子や孫のためと称して人生の大切な時間を誤って費やし悪業を積み重ねた者には、冥界でその報いが訪れる。深い恨みを買った者は橋の下に沈められ、そこでは毒蛇や悪しき獣たちが入り乱れて襲いかかる。魚やエビ、カニやスッポンまでもが道を塞ぎ苦しめる。だが、孝行な子や忠義に厚い者は、出迎えを受けて導かれ救われる。功績が高く徳が深い者には、鬼たちも敬意を払い、それらは西方極楽へと送られ、安らぎを得ることもある。また、善を楽しみ、さらに修行を重ねる者もいる。心が鏡のように澄みきっていれば魔も近づけず、心根が山のように揺るがなければ災いも近寄らない。生きている人々に伝えた。ここに来て無念のまま捕らわれることのないように、と。)

・「阿鼻地獄」(36葉) 陰司裡十八層阿鼻地獄 是陽間行凶漢 惡毒之人 頭一等作惡人怨天恨地 打善人罵道友不敬神明 二等人行惡的不孝父母 打爺娘罵尊長忤逆之人 三等人行惡的殺人放火 劫人家財其害害人性命 四等人行惡的姦人妻女 談閨闈唆詞訟破人婚姻 五等人行惡の開齋破戒 打人在阿鼻獄永不番身 (冥界には十八層の地獄があり、その中でも最も恐ろしいのが阿鼻地獄。そこは、現世で極めて悪辣な行いをした者らが墮ちる所。一番目は悪事を働き、

天を恨み、地を呪い、善人を打ち、道を説く者を罵り、神仏を敬わぬ者ら。二番目は不孝を働き、父母を殴り、祖父母や年長者を罵り、逆らった者ら。三番目は人を殺し、火を放ち、他人の財産を奪い、命を害した者ら。四番目は人妻や娘に手を出し、家庭の内情を暴き、言葉巧みに訴訟を煽り、他人の婚姻を壊した者ら。五番目は精進潔斎を破り、戒律を犯し、仏道を侮辱した者ら。殴った者は阿鼻地獄に堕ち、永遠に抜け出すことはできない。)

以上は、地獄巡りの部分であり、目連宝卷の最も紙幅が割かれた部分であるが、現世で働いた悪事、特に「不孝」(「孽鏡台」)、「悪行」(「破銭山」「剥衣亭」)、「衣服を与えぬ吝嗇」(「寒氷地獄」)、「好色・道楽」(「神鶏山」)、「自私自利・殺生」(「變畜受刀割之報」)、「父母舅姑への不孝」(「血湖池」)、「公共事業を行わない」(「滑油山」)、「節操を守らず再婚を繰り返す女」(「鋸解刑」)、「口がうまく人を騙人」(「抜舌抽腸」)、「嫉妬し親不孝な女」(「鉄板地獄」)、「外道・仏に帰依しない」「戒律違反」(「碓舂地獄」「炮烙の刑」)、「姦淫」(「惡犬地獄」)などの罪とそれに科される地獄での刑罰が具体的に記され、それによって恐怖心と悔恨の情を導こうと意図されている。多くは七言でうたわれる因果応報の教訓詩であり、罪の多くは日常の生活における道徳的振る舞いが中心である。また、主に女性を対象として(「血湖池」)、「鋸解刑」)、「鉄板地獄」)描写されているが、その背景には宣卷(宝卷上演)の聞き手が女性であることがあるのだろう。

このような地獄描写については、これまで澤田瑞穂氏が、「本来は亡者の罪障消滅と浄土への超昇を希求するための仏事で、地獄の業苦を現世の人々に伝えることによって世人の戒惡作善の一助とし、かねて供養を営むものにとっても功德を積むことになるという趣旨のものであったから、宝卷作品には地獄とか十王とかを主題とし、あるいは地獄見学を一節として入れることが主題となっていた。」⁹⁾と記しているが、まさに、地獄の業苦を伝えることによる亡者の罪障消滅と現世の人々が戒惡作善へと導く教訓性が宝卷のもつ宗教的一面であり、目連宝卷においても例外ではなく、その特徴であることを示している。

3.3 母への恩をうたう

ついで、目連宝卷において、地獄描写を描く前に母への恩がうたわれていることに注目したい。精進を解き看經念仏を行わないことによって地獄へ落ちた母劉氏ではあったが、本来、慈愛と献身に満ちた人物であったことが記されている。それは、後に目連による救済を導くための布石といえよう。その部分を以下に取り上げる(原文はテキストの11葉及び12葉にみえる。)

・一重恩 虧我娘 懷胎我 在腹中 茶不思 飯不想 面黃饑瘦 吃一樣 怕一樣 腹中饑餓斷腸 只恩情 想當初 苦我娘親(一つ目。母のおかげだ。私を身ごもってくれたとき、母はお茶も飲めず、食事もし喉を通らず、顔色は悪く痩せ細っていった。食べてもしんどく心配もしんどい。母は空腹で、腸が千切れるほどの苦しい思いをした。その恩を思うだけで、当時、

9) 澤田瑞穂著『修訂地獄変』(平河出版社、1991) p231。

母がいかに苦しんで私を産んでくれたかが胸に迫る。)

・二重恩 虧我娘 要分娩 將身側 一陣痛 二陣疼 疼痛難當 疼一陣 緊一陣 痛昏去
疼煞了 只恩情 想當初 苦我娘親 (二つ目。母のおかげだ。私を産むとき、母は身をよじる
ほどの激しい痛みで襲われ、一度痛みが来れば、また次の痛みが押し寄せ、耐えがたい苦しみ
に耐えていた。痛みの波が締めつけるように続き、気を失うほどの激痛に見舞われた。その恩
を思うだけで、当時、母がいかに苦しんだかが胸に迫る。)

・三重恩 虧母親 兒在腹中 要奔生 爪指輕痛 蹬衣胞 兒落地 母昏沈 喉中氣斷 死
過去 又還魂 險些兒 見閻君 想當初 苦了親娘 (三つ目。母のおかげだ。子がお腹の中に
いて生まれるとき、指先に痛みが走り、胎内を蹴られるような激しい苦しみが続いた。子ども
が生まれ落ちると、母は意識を失い、息が止まり、死の淵に落ちた。それでも再び息を吹き返
し、危うく閻魔に会うところだった命を繋ぎとめた。その恩を思うだけで、当時母がいかに苦
しんだか胸に迫る。)

・四重恩 虧母親 生下我 纔放心 代兒子 取乳名 謹記八字 未滿月 出香房 穢汚臭
最難當 只恩情 想當初 苦了親娘 (四つ目。母のおかげだ。母は私を産み落としてやっと安
心した。身代わりの子として乳名をつけ、八字 (生まれの干支) を心に刻んだ。まだ生後一か
月にも満たないうちに、産室を出たが、そこは血や汚れの臭いが満ちていて、母は最もつらい
時期だった。その恩を思うだけで、当時いかに母が苦勞したかが胸に迫る。)

・五重恩 虧我娘 洗尿尿 和衲子 水成冰 透心涼 十指凍破 熱好挨 冷難當 不顧
臭 不顧臟 只恩情 想當初 苦了親娘 (五つ目、母のおかげだ。オシメを洗い、排泄物の世
話をしてくれた。水は水のように冷たく、身にしみる寒さだった。十本の指は凍えてひび割れ、
暑さは耐えられても、寒さはこたえるものだ。それでも母は、臭いも汚れも気にしない。その
恩を思うだけで、当時いかに母が苦勞したかが胸に迫る。)

・六重恩 虧我娘 每日間 喂乳養 兒啼哭 娘心慌 連忙抱起 哄孩兒 上街坊 拿銅
錢 去買糖 想當初 苦了親娘 (六つ目、母のおかげだ。母は毎日、私に乳を与えて育ててく
れた。私が泣けば、母は急いできて、すぐに抱き上げてあやしてくれた。町へ出れば、小錢を
出して飴を買ってくれた。その恩を思うだけで、当時いかに母が苦勞したかが胸に迫る。)

・七重恩 虧我娘 到晚來 抱在懷 仝兒睡 臥尿塘 蓆子濕 只邊濕 睡只邊 那邊濕
睡那邊 兩邊濕 睡身上 想當初 苦了親娘 (七つ目、母のおかげだ。夜になると、私を胸に
抱いて一緒に眠ってくれた。おしっこで寢床が濡れたときは、敷物のこちら側が濡ればあち
ら側に、あちら側が濡ればこちら側に、両方濡れてしまえば、母は自分の体の上に私を寝か
せてくれた。その恩を思うだけで、当時いかに母が苦勞したかが胸に迫る。)

・八重恩 虧我娘 出天花 兒身上 見標兒 不來漿 爺娘怕 敬痘神 許燒香 請先生
求藥方 怎敢忘 苦了親娘 (八つ目、母のおかげだ。私が天然痘を患ったとき、発疹の兆しが

出ても膿が出ないので、父も母も不安で、痘の神に祈りを捧げ、供え物を焼いて願掛けをし、医者を呼んで薬方を求めた。どうして母の苦労を忘れられようか。)

・九重恩 虧我娘 児頑要 放蕩行 前門望 口中喊 身上冷 穿衣裳 肚中餓 吃茶湯 這恩情 苦了親娘 (九つ目、母のおかげだ。子どもの私は遊んでばかり、好き勝手に振る舞った。家の前で母を待ち、母を呼んだ。寒けりゃ母が服を着せ、腹へりゃ母が茶粥を食べさせてくれた。こうしたことは母を苦しめた。)

・十重恩 虧我娘 請先生 上學堂 哄孩兒 上書房 休要頑要 寫好字 娘有賞 還要 做 新衣裳 只恩情 想當初 苦了親娘 (十番目の恩、先生にお願いして、学校にも通わせてくれた。子どもの私をなだめながら書齋に座らせ、「遊んではいけません」と言い、字をきれいに書けば褒美をくれた。さらに、新しい着物まで仕立ててくれた。こうした恩は、当時を思い起すだけで、どれほど母を苦しめてきたか胸に迫る。)

この母の恩に対する感謝の唱詞からは、目連宝卷が「孝」の道徳を取り込んで教化する側面の強い芸能であったといえる。母への恩は、他の宝卷、例えば七言唱詞『二十四孝報娘恩宝卷』などにおいてもみられるものである。『二十四孝報娘恩宝卷』は、版心が「懷胎卷」と記されているように、母の妊娠中の十か月の苦労と教育を授けてもらうまでを段階的に記している¹⁰⁾。本科研の代表である松家裕子氏は¹¹⁾、かつて杭州市の蕭山において耳にした民間歌謡「十月懷胎」について、母への恩が「一報、二報、…」とうたわれることを紹介している。例えば、母の姿は「三報 …三餐菜飯無知味 我害娘親 面黃肌瘦少精神」である。その内容は、『目連三世宝卷』の「一重恩」における「茶不思 飯不想 面黃饑瘦」に類するものであり、これらは民間宗教の枠を超えたより普遍的な母への感謝の念の表現であったのかもしれない。

3.4 不浄の罪

一方、産む性への感謝は、産まない性の否定と同時に不浄を強調する面も併せもち、女性ならではの地獄での辛苦を更に際立たせることになる。

「目連三世宝卷」の中で、母が犯した「不浄の罪」、すなわち月経・出産に関する「血の穢れ」は、前述のように「未曾満月堂前過 觸汚宗祖與家堂 未曾満月厨房過 觸汚竈君過往神 未曾満月河邊洗 觸汚水府海龍王 又將不潔衣裳曬 觸汚天堂日月光」とうたわれていた。これは、血盆経（女性の血の穢れが地獄墮ちの原因になるという民間信仰）と深く結びついている。また、民国期の宝卷に広く見られる「女性の不浄観（産後忌）」と民間宗教の「触汚（けがれ）」観念を結びつけた戒めの句で、産後の女性が一定期間、神仏・家堂・竈神・河神などの聖域に

10) 澤田瑞穂著『増補 寶卷の研究』(国書刊行会、1975) 卷三、p147。

11) 松家裕子「『十月懷胎』について—余華から説き起こす」『吉田富夫先生退休記念中國學論集』(吉田富夫先生退休記念中國學論集編集委員会編、汲古書院、2008) pp.423-436。

近づくことを禁じる民間信仰の反映であり、崇拝の対象は、日々の生活の中で切っては切れない存在である宗祖、家堂、竈君、海龍王、日月である。

血が地神（大地を司る土地神）を汚すという観念の下、汚れた衣を川で洗うと水神を汚すという見方は、『大藏正教血盆經』（偽經）や血盆經の周辺文献（善書・戒書）にもよく見られる。たとえば、『佛說大藏正教血盆經』¹²⁾に「女人産下血露，汚觸地神。若穢汚衣裳，將去溪河洗濯，水流汚漫，誤諸善男信女取水煎茶…」とあり、また道教系の『太乙救苦天尊說拔罪酆都血湖妙經』でも「只是女人，産下血露，汚觸地神。若穢汚衣裳，將去溪河洗濯，水流汚漫，誤諸善男信女取水煎茶…」¹³⁾と同様の内容が記されている。河川や泉水が日常生活に不可欠なものであることから迷信的イメージを超えた衛生観念もその根底にはあったのかもしれない。

3.5 江南において目連の宝巻が語られる意味

では、目連に関する宝巻や芝居がなぜ綿々と演じられてきたかという点について考えてみよう。その背景には、疫病や飢饉をもたらす虫害を鎮めるという現世利益的なものがあつた、という。澤田瑞穂氏は次のように指摘する。「もともと祭礼用の奉納芝居が神の怒りを、鎮め神を慰めるものである上に、目連戯が冥界に棲む無数の亡者や飢餓を超度するものであるから、類推して妖魔邪鬼の精霊をも鎮圧駆除する呪術的な効能をもつと考える。あるいはまた地方に溺死・縊死・毒死その他の変死者が多く出ると、その冤恨が成仏できずに浮遊して厲鬼となり、疫病や虫害などの原因になる。だから演劇によって冤恨を慰め鎮めることによって災害が除去できるとも考えるのである」¹⁴⁾と。

「目連三世宝巻」においても同様の考えがその根底にあつたのであろう。同時に、「目連三世宝巻」においては、これまで見たように、宣巻によって、大衆を教化する意図もあつた。すなわち、「目連三世宝巻」は、民間の宗教性と日常の教化性を備えた語り物であつた、といえる。

次に、目蓮故事の日本における受容に目を転じよう。

4. 日本における目蓮故事の受容—富山県を例に—

日本においても、目蓮故事は民間芸能の形で広く受容されていったが、とりわけ筆者の住む北陸地方においては顕著であり、今日各地域に録音資料や文字化された資料として残っている。このことについては、先述のように吉川良和氏が注目し関連の論考を発表してこられた¹⁵⁾。

今日目にすることができる富山県内に残る目蓮資料について見てみれば、代表的なものとし

12) 国学典籍網」<http://ab.newdu.com/book/ms312966.html>「大藏正教血盆經」

13) 「善書圖書館」<https://taolibrary.com/category/category79/c79013.htm>「太乙救苦天尊說拔罪酆都血湖妙經」（影印）

14) 澤田瑞穂『修訂地獄変 中国の冥界説』（平河出版社、1991）p137。

15) 「南砺系ちょんがれ目蓮盆踊り唄の詞章研究」『人文学研究所報 No.62』、2019.9。

て、『日本庶民生活史料集成』（1972）¹⁶⁾、『富山県の民謡』（1979）¹⁷⁾、『富山県民謡緊急調査報告書』（1985）¹⁸⁾に収録された資料が挙げられる。また、その他、魚津¹⁹⁾と福光²⁰⁾などで独自に翻刻した資料も存在する。

『日本庶民生活史料集成』には、「礪波市鷹栖チョンガレ 目蓮尊者」と「井波町チョンガレ 目蓮尊者地獄巡記」の二種が収められている。「チョンガレ（ちょんがれ）」とは何かについて、同書には、「チョンガレ節も門付けばかりでなく、娯楽の少ない農村漁村の祭礼や盆踊りに欠かせない、民間芸能だった時代がながい。」²¹⁾「いうまでもなくチョンガレは、説経祭文から変化したといわれるが、テキストとしての台本も語り口も、きわめてよく似ていたとおもわれる。ただ節が早口で軽快になり、それにつれて軽口や冗談をまじえて人を笑わせ、やがてチョンガレ独特の台本もできたのであろう。したがってチョンガレは台本に主として説経祭文をもちい、ときには浄瑠璃の一部を口説にして語ることもあったらしく、台本は既製のものをつかいつながりながら節だけはチョンガレ節だったわけである。」²²⁾とある。なお、チョンガレについては朝鮮語由来であるという見解もある²³⁾。また「せり込み蝶六」という言い方もある。「せり込み」は「口速」の意味であり、蝶六は「ちょろける」という語が訛ったものとの説」と解されている²⁴⁾。

以下、江南の目蓮宝卷と比較するために、目蓮故事がうたわれた理由や目的が記載されている箇所、および段ごとの梗概をごく簡単に紹介する。

4.1 『日本庶民生活史料集成』所収「目蓮故事」

① 礪波市鷹栖チョンガレ 目蓮尊者²⁵⁾

開始時：「抑そもそもくわんしやうを申奉る。夫七月七日せんよふかけるの其の由來をひろめ奉る」

梗概 第一段 目蓮の紹介の後、如来に父の成仏のことを訊き喜ぶ。第二段 次いで母は大悪人であったため八万地獄へ落ちたと聞く。第三段 父のことと母の住処を訊き3日間の地獄めぐりの暇を願うが如来からは百日百夜の暇が与えられた。蓑と笠も戴く。学問所で法華経、浄土

16) 『日本庶民生活史料集成』「民間芸能」第十七巻（三一書房、1972）

17) 黒坂富治著『富山県の民謡』（北日本新聞社出版部、1979）

18) 『富山県民謡緊急調査報告書』（富山県教育委員会編集発行、1985年）

19) 山形隆幸編著『うおづ盆踊り唄—お蝶六かんや—』（魚津歴史同好会出版、1989）

20) 福光ちょんがれ保存会編『目蓮尊者』（全12頁、2018）

21) 『日本庶民生活史料集成』「民間芸能」「萬歳・チョンガレ節・口説」p453。

22) 『日本庶民生活史料集成』「民間芸能」p455。

23) 上記注20の末尾に、吉川良和氏の見解として、「対岸の大陸の「ハイカラな言葉」として、使われたのではないかと思います。」と朝鮮語由来の可能性が記されている。

24) 『富山県民謡緊急調査報告書』「民間芸能」p26。

25) 『日本庶民生活史料集成』「民間芸能」pp.493-494。

三部經、地藏經をもらい旅支度して旅立つ。行く先々の地獄の難所や大蛇を法華經、浄土三部經、地藏經を誦經して、また兄弟子阿難の助けを得て無事通り抜ける。**【第四段】**法水川の老川の老母御前の処に着き、三部經、大般若經、法華經を読み肌着一枚を差し上げ無事通過。幾つかの峠を経て、女人三途の地獄へ到着する。**【第五段】**女人地獄を何とか通り過ぎ、八万地獄の門口に到着する。**【第六段】**門が開き、僧侶が来たためしはないと言われるが、母のいる地獄に近づいたことを喜ぶ。**【第七段】**成大王がいて、釜の中に小鉄棒を差し込んで、ぜんざいと三遍唱えて、左の腕から右の腕へ刺し通せという。(以下欠)

② 越中チョンガレ節 井波町チョンガレ 目蓮尊者地獄巡記²⁶⁾

開始時：^{そもそも}「抑々尊書申し奉るに、年の月日は十五日、千部施餓鬼^{さて}の扱其由来、能も^{よく} 倩^{つらつら} 尋て見るに、恭くも大聖釋迦牟尼如來我來衆生を西道の爲に、此世八千餘度の來向、後の五百の其の大願は、皆衆生の御爲でござる」²⁷⁾ **梗概** **【第一段】**目蓮の出自を述べる。如来に父母の冥途の行方を問う。父は、原内国にいて大善人で功德を積んだがゆえに悟りを開き自在安樂限りないと聞く。**【第二段】**母は原内国で第一番の處大病女という悪人と聞く。閻魔大王が浄玻璃鏡でみて恐ろしい姿が映ったので、獄卒に命じ九丈二尺の鉄棒を左腕から右に通し八万地獄に落としたという。**【第三段】**3日間の地獄めぐりの暇を願うが如来からは百日百夜の暇をもらう。また、蓑と笠も戴く。学問所で法華經、浄土三部經、血盆經、地藏經をもらい旅支度して旅立つ。三途の川の苦難も誦經して潜り抜け、また如来に命じられて大蛇に化けた兄弟子阿難の助けで無事通り過ぎる。**【第四段】**清水河原の老母(22の角、眼は百千鏡の如く、色は朱紅、髪の毛は針金の如く、手には九丈の鉄棒)に案内を願うも応ぜず。そこで目蓮は、浄土三部經、般若妙法蓮華經を読む。老母は聞き入れ、目蓮の母が着ていた肌着を与え地獄の道を教える。劍峠、火ふり峠、盤石峠、聞き峠の難所を釈迦からもらった蓑と笠で何とか通過。まもなく女人不産の地獄に到着する。**【第五段】**続いて血の池地獄。広く深い地獄に橋(細い糸)がかけてある。落ちればそのまま地獄。目蓮は、結文(血盆)經を殊勝に読誦し、南無阿弥陀仏と書いて血の池地獄に18枚投じると地獄が枯れて有罪無罪の人々が皆成仏した。また急いで母のいる八萬地獄の門に至る。目蓮は、南無阿弥陀仏と唱え、またそれを三遍書いて如来の神通力を願った。釋栴檀、藥師如来、觀音、無量壽如来に礼拝し、鉄の門を開けた。紺屋地獄、鍛冶屋地獄、百姓地獄などを巡る。八面大王がいて、九丈二尺の鉄棒をもち湯玉立つ地獄の中を回し是ぜんざいや是ぜんざいやと三遍唱え左腕を左へさせば母に会う、と言う。瘦せこけた母がいた。そこで血盆經を唱えると湯玉も消え、地獄の深さも減り有罪重罪の人々は釜の縁に這い上がったが、母だけが沈んでいる。目蓮が母の名を呼び、手に持つ經で母を招き、釜から引きあげた。母か

26)『日本庶民生活史料集成』「民間芸能」pp.515-521。

27)『日本庶民生活史料集成』「民間芸能」p515。

ら地獄の苦しさを聞き、目蓮は法華経と三部経の読誦で釜を割れば多数の罪人が出てきて悟を開く。しかし母は邪険さゆえに再び地獄に沈む。目蓮は釈迦如来に母の救済を願う。如来は施餓鬼の供養をせよと言う。そこで供物や灯籠を釈迦の命の通りに準備し八万余人の弟子を集めて施餓鬼経を勤めると母は幽霊となり釈迦如来の前に現れる。目蓮は、母が悪人済度のために、阿弥陀のそばの観音に封じられると聞いて喜ぶ。

以上 4. 1 ①②の二種はともにうたわれる理由を施餓鬼の由来を説くためと語っているが、やがて目蓮の出自に重点が置かれていく。次いで目蓮は釈迦如来から、父は善人で悟りを開いているが、母は大悪人で八万地獄にいと聞き、如来から休暇の許可を得て母を探しに行き地獄を巡る、という話となる。目蓮は地獄巡りに、①では三部経、大般若経、法華経、②では法華経、浄土三部経、血盆経、地藏経を携えていくが、いずれにせよ、浄土三部経を携えていく点は浄土真宗の盛んな地域に由るためであり、特徴的な点といえよう。また、地獄巡りの描写は、聞き手の恐怖心をそそるというよりは、説教的物語的要素をもち、かつ客観的であるといえよう。同書の「萬歳・チョンガレ節・口説 解題」にも、「このように越前や越中のチョンガレまたはチョボクレに、説経的要素がつよいのは、浄土真宗地帯特有の現象かともおもわれるが、これがチョンガレ・チョボクレの原始形態であり…真宗の唱導に利用されて定着したと解すべきものとおもう」²⁸⁾と記されている。

4. 2 『富山の民謡』所収「目蓮故事」

昭和54年(1979年)『富山の民謡』²⁹⁾「盆踊り唄」の項にも、「目蓮故事」関連の唄が収められている。「目蓮尊者地獄めぐり」が、「段物」として挙げられている場合もある。「段物」とは「一種の語り物」³⁰⁾であるという。

以下に、「目蓮尊者」あるいは「目蓮尊者地獄めぐり」と明示されている民謡および目蓮故事と関連があると思われる詞章を列举する。

① 黒部市 盆踊り唄 千秋楽「目蓮尊者」³¹⁾

開始時「きょう吉日のおーぐれも めでたく千秋楽となりまして 私ようなるふやっこ野郎も なにか一言申そうなれば こねとき出すそのもうあたり お盆踊りの由来 目蓮経の一端を おそれながら おめでたや(ヨイ ヨイ)」終了時「(目蓮尊者)さて、地獄めぐりの装束には 下には白じゃくかたびらに とうの衣にかうの袈裟 笈にはあまたの御経を認め わが家を立ち出で給うところこそ哀れなる これより目蓮尊者地獄めぐりというところは 丁度段

28) 『日本庶民生活史料集成』「民間芸能」p457。

29) 黒坂富治著『富山の民謡』(1979年、北日本新聞社出版部)

30) 『富山の民謡』p235。

31) 『富山の民謡』pp.245-246。

境となりました めでた繁盛で別れまいかイヤーハナー」 **梗概** 目蓮の紹介の後に如来から父母のことを訊く。父のことと母の住処を訊き7日間の地獄めぐりを願う。如来は15日の暇を与える。

② 魚津市 せり込み蝶六³²⁾ (盆踊り唄)

(地獄関連の記述)「死出の山路や三途の大河 阿防羅刹に追い立てられて ひとり泣く泣くや 閻魔の庭 業の秤や浄玻璃鏡 向かうその時やよ (言) い訳や立たぬ 右も左もつるぎの山」とあるのみ。

③ 上市町 段物「目蓮尊者地獄めぐり」³³⁾

梗概 目蓮の紹介。如来に、父は東天竺の主で名は用飯大王で立派な人物であったと聞く。「同行の茶飲み話」として「罪業」の深さと「懈怠」によってもたらされる人間の行く先をうたう。**終了時**「死出の山路や三途の大河、阿防羅刹にゃ追い立てられて ひとり泣く泣く閻魔の庭に 業の秤や浄玻璃鏡 向かうその時や 言い訳や立たぬ 右も左も剣の山よ 追いつ追われつ幾千万劫 焼かれ焦がされ身を切り裂かれ こぼす涙じゃ天をば仰ぎ 大地たたいてゃ七転八倒 泣けど叫べどその甲斐ない 聞くも恐ろし地獄の苦吟 のがれ難いはわが身の上 数の仏の御慈悲に洩れてとても叶わぬ悪人なりと 見捨てられたる大罪人を阿弥陀如来は助けるために 五劫思惟にゃ思いを碎き 阿鼻の炎や紅蓮の氷や 毒の中にも幾千万劫と 忍び難きを忍ばせ給い わたし一人その身代わりに あなた一人が身はひき受けて 一行つんでは衆生がためと 一願つんでは女がためと 汗や膏の御修行中に 汗や膏の御修行中に 施し給うや御身の耳は めくらせん (山) の如くなり 施し給うや御身の肉は 千須弥山の如くなり 捨て給うや御身の骨は 大鉄圀山の如くなり 剥がせ給うや御身の皮は 三千世界の大地如く 絞らせ給うや御身の血汐 四大海より多しとござる。」(阿弥陀如来は「大罪人を助ける者」として登場。囃子は略す。)

④ 大山町 (1)「サッサ」(2)「えんやら」³⁴⁾

(1)「サッサ」に目蓮と父・用飯大王の紹介があり、(2)「えんやら」に目蓮の名前はないが、地獄の紹介がある。「地獄地獄はなけれども とりわけ人道修羅道に 餓鬼畜生道 こんや地獄に 鍛冶地獄 ハイナンジャイナ 無間地獄にみねつ血の池 とたて地獄となりました とたて地獄の苦しみは ハリヤ 天にはネ 高層の網を張り 地に乱杭の剣を打ち 四方四面と申するはイ」³⁵⁾ (囃子は略す。)

32) 『富山県の民謡』 pp.259-260。

33) 『富山県の民謡』 pp.267-269。

34) 『富山県の民謡』 pp.297-302。「一通り踊ると三時間ほどかかる」(同書 p297) とある。

35) 『富山県の民謡』 p300。「黒部」の表現とほぼ同じである。

⑤ 福光町の盆踊り唄 ちょんがれ 段物「目蓮尊者」³⁶⁾

(1) さかた (目蓮尊者初段)、(2) 本回り (目蓮尊者二段)

開始時「そもそも勧請しましたハイ奉れば 年の七月は十五日や 宣布施餓鬼のサテその由来よくもつらつたずねて見れば」と目蓮の由来をうたう。目蓮は母の行方を求める努力をした(「音に名高き大経読ませ 昼は法華経の御文を操らせ 昼夜わかつた見給いけれどさらに未来の行方が知れぬ」)がかなわず如来の力を乞う。父の昇天は知ったが、母が八万地獄に落ちたと聞く。また、母が野辺送り時および地獄においていかに悲惨で苦しかったかを聞く。(本回りは、本稿4.4で取り上げる「魚津の目蓮尊者地獄めぐり」の詞章ときわめて類似している。)

⑥ 五箇山三村のちょんがり (目蓮尊者地獄巡り三段)³⁷⁾

目蓮は如来から三日三夜の暇を乞うが百日百夜の暇をもらい、法華経、浄土の三部経、結分経(血盆経)、地藏経をもち 旅装束をして地獄巡りに出かける。

⑦ 旧上平村 猪谷³⁸⁾

盆踊り唄は(1) あさい(2) 川崎(3) 草島節(4) はるわいな(5) さかた(6) ちょんがり、からなる。そのうち(5) さかたは、「目蓮尊者地獄巡り 初段」と記されている。

開始時「そもそも勧請エ申し奉るにはエ年は七月 日は十五日 宣布施餓鬼のサーテその由来を ちょっとつくづくたずねて見るにゃ…」**梗概** 目蓮の由来紹介。釈迦に父と母の行方を尋ね、父が悟を開いたことを告げられる。一方、母の死後についてその苦しみが唄われる。

4.2について、その特徴をみてみよう。①黒部市に伝わる盆踊り唄の千秋楽「目蓮尊者」は、開始時に、盆踊りの由来は目蓮経にあるため、盆踊りの千秋楽にうたう(「お盆踊りの由来目蓮経の一端を おそれながら おめでたや」と記されている。本資料には「段境」があるのみで、この段の後に何が記されているか今のところ未見であるが、少なくとも「笈にはあまたの御経を認め」の記載からは、目蓮が携えた經典で悪霊を調伏させるという姿が想像される。②は魚津盆踊り唄であるが、「ここに同行のお茶飲む話」とあり、また「せり込み蝶六」とあることから「口速」の「おちゃらけ話」であり、罪業と懈怠の日々を送った人間が地獄に行くという唄の中に地獄描写が挿入されているに過ぎないと思われる。しかし、後述するが、当地には他にうたい終わるまでに数十分は要するだろう「目蓮尊者地獄廻り口説き」³⁹⁾があった。③は内容的には②魚津の語り物の一部といってもよいものであろう。ただ、地獄描写は詳細に記されているものの、恐怖心を掻き立てるというものでもない。④については、(1)「サッサ」

36) 『富山県の民謡』pp.326-329。福光の「ちょんがれ」は、およそ「さかた」「本回り」「栗拾い」「すすきは」「ふみかえし」の順序でうたい踊るという(同書p326)。

37) 『富山県の民謡』pp.333-334。

38) 『富山県の民謡』pp.342-344。

39) 宮坂彦成編『うおづ盆踊り唄—お蝶六かんや—』(魚津せり込み蝶六保存会発行、2000)

には、「慈悲第一のマーエアリヤ大王もエ ハイヤーアーハイノー 娑婆の習いのことなればーエー 四十九歳が一期となりて 遂に空しくなり給うエ 娑婆を離れて末の世はエ これより西方極楽のエ 弥陀の浄土がヤーエ アリヤすみかなんどエ…」死後は「西方極楽 弥陀浄土」に行くとうたわれる。④の(2)「えんやら」では地獄名が二か所に登場するが、両者ともに「…かくてその後、地獄地獄は多けれども⁴⁰⁾、とりわけ人道修羅道に 餓鬼畜生道 こんや地獄に 鍛冶地獄 ハイナンジャイナ 無間地獄にみねつ血の池 とたて地獄となりました とたて地獄の苦しみは ハリヤ 天にはネ 高層の網を張り 地には乱杭の剣を打ち 四方四面と申するはイ」と、その名が羅列されるにとどまる。また、④の(3)「加賀崎」にも「サー陽も入り合いのその時じゃーイ 地獄の鬼が現れて ヤハレ汝ら何をするイ娑婆に残りし父母が追善供養も勤めずに ヤハレそのセージャ 皆さま上手じゃーノーイ…」などと追善供養を促す一句がある。このように、盆踊り唄の中で、死後のこと、地獄名、追善供養の促進等がうたわれるが、一通り踊ると三時間ほどの長い盆踊り唄の中では、きわめて短い詞章である。⑤の南砺一帯では「勧請」ということばで始まり、「七月十五日」の「施餓鬼の由来をよくもつらつらたずねて見れば…」とあり、説教節などで神仏や社寺の由来を説く「本地物」と同じパターンである。このように目蓮故事は、地獄描写などを含め、猪谷、魚津とはほぼ同じ内容であることから、富山県内一円に盆踊り唄として広まっていたことが窺える。また③上市の例のように。阿弥陀如来が「大罪人を助けにくる」として登場しているのは真宗王国富山の土地柄ゆえではないかと思われる。

4.3 『富山県民謡緊急調査報告書』所収「目蓮故事」

富山県では、昭和60年(1985年)に『富山県民謡緊急調査報告書』⁴¹⁾が出版された。調査の背景には、「(数多くの民謡が)近年における産業や生活様式の急激な変化に伴い、私たちの気づかないままに衰滅しつつある。」⁴²⁾という時代背景や社会の変容に伴う民謡消滅の危機があった。採録された民謡は、活字での紹介の他、録音資料も伴う。民謡は多くは盆踊りであるが、踊りに要する時間はそう長くはないものの、その中に目蓮(当該報告書では「目連」と記されているが、小稿では日本における表記を「目蓮」とする。)の名が出現する唄と目蓮故事に極めて類似する詞章がある。それらを示せば次のとおりである。

① 細入村の項 猪谷盆踊り唄(2)かわさき(目蓮尊者地獄めぐり)⁴³⁾

目蓮尊者の紹介があり、釈迦牟尼如来に自分の父母について尋ねると父は用飯大王といい、

40)「なけれども」とあるが、後半では「多けれども」と記されていることから文意から「おおけれども」に改める。

41)『富山県民謡緊急調査報告書』(富山県教育委員会編集発行、1985年)

42)『富山県民謡緊急調査報告書』p3。

43)『富山県民謡緊急調査報告書』p89。

神や仏に供養あった人物、母はしょうたい夫人といい慳貪邪見の人などと記される。(採録は途中まで)

② 氷見 チョンガリ 目蓮尊者地獄廻り⁴⁴⁾

目蓮の紹介(目蓮を日本大和の坪坂寺の如意輪観音の弟子とする)

③ 福岡町の項 盆踊りの小唄⁴⁵⁾

「昔 昔 西大竺に 釈迦牟尼如来と申すお方がおりまして 多くの弟子をもたれしに 八万人と申すなり ここにあわれをとどめまするに 目蓮尊者の母親は」の詞章のみ。

④ 城端町の項 ちょんがれ ちょんがれ台本「目蓮尊者冥途行願」⁴⁶⁾

7月15日の施餓鬼および大聖釈迦牟尼如来の弟子の目蓮尊者の由来をうたう。釈迦牟尼如来に目蓮の父母の由来を尋ねれば、父は波羅国の超輪大王という尊い方であると言うが、母への言及はない。

⑤ 平村の項 ちょんがり(盆踊り唄)目蓮尊者地獄めぐり 三段⁴⁷⁾

目蓮は地獄めぐりの暇を乞い、法華経・浄土三部経・血盆経・地藏経をもち、旅装して出発。

⑥ 上平村 盆踊り唄(本回り) 目蓮尊者地獄巡り 全五段⁴⁸⁾

第一段開始時「抑々勧請を申奉に年の七月、日は十五日宣布施餓鬼の偈て其の由来…」施餓鬼の由来と目連の由来を述べ、目連の父母のことを尋ね、「その父は原内国の諧茂輪^{ておくりんだゆう}大夫と申して国に希^{まれ}なる大善人」と知る。**第二段**母は、「原内国にて第一番の、処大扈女^{しょだいこじょ}の悪人也よ」と知る。そこで地獄に母を尋ね閻魔大王に情渡利鏡^{ママママ}(浄玻璃鏡)を見せてもらい、八万地獄に落ちたと告げられる。**第三段**釈迦の下に行き三日三晩の休みを乞うと、百日百夜の暇をもらう。法華経・浄土三部経・結分経(血盆経)・地藏経をもち、旅装にて出かける。三途の大河を兄弟子阿難尊者の化けた大蛇に助けられる。**第四段**清水川原の姥(奪衣婆)に出会い母を探していることを訴える。また経を読み、姥を説き伏せる。その後、地獄への道を教示される。剣峠・火降り峠・盤石峠・閻峠・難所の峠などを知る。うまず地獄をも通る。**第五段**血の池地獄に行くが「南無仏南無阿弥陀仏」を唱えながら池に入れば血は減った。八万地獄に着く。湯玉飛び立つ地獄で瘦せさらばえた母を見る。目連が釈迦の金言結分経を読めむと湯玉は消えた。母を成仏させる方法を釈迦に尋ねれば施餓鬼の供養をするようにとのこと。施餓鬼飯を用意し、白黒青赤幡を立て、高く灯籠をともし、外に数多の飾りをつけ、釈迦や弟子を呼び施餓鬼御経を読めば母は済度されるという。

44) 『富山県民謡緊急調査報告書』p108。

45) 『富山県民謡緊急調査報告書』p142。

46) 『富山県民謡緊急調査報告書』pp.159-160。

47) 『富山県民謡緊急調査報告書』p166。

48) 『富山県民謡緊急調査報告書』pp.180-186。

先述4.2で列記した『富山県の民謡』所収③魚津「せり込み蝶六」、⑦猪谷「盆踊り唄」には「罪業や懈怠の日々を過ごせば閻魔のところに連れていかれる」と記されていたが、『富山県民謡緊急調査報告書』所収の魚津「せり込み蝶六」⁴⁹⁾や黒部の「蝶六」⁵⁰⁾にも、目蓮故事とは明示されていないものの同様の記述がある。たとえば、魚津「せり込み蝶六」は、地獄描写の後ろに「こんな邪見も慳貪者も 弥陀の本願聞き分けましょか 京も田舎も日本国中 御化度あまねくひろませたまい…他力不思議の南無阿弥陀仏 機法一体願行具定 助けたまえと助かるほうも」とあり、「罪業や懈怠の日々」を送った人が地獄へ落ちるのは目蓮故事に限ったものではなかったことが窺える。また、「他力」「機法一体」「願行具定」など浄土真宗固有の教えが記されていることにも注意したい。

4.4 魚津の目蓮尊者地獄めぐり

ここでは、江南の目蓮故事と比較するため今日もうたわれている「魚津の目蓮尊者地獄めぐり」を取り上げ分析したい。「魚津の目蓮尊者地獄めぐり」は長編の段物、すなわち「一種の語り物」である。井波、福光、猪谷などの「目蓮尊者地獄めぐり」とその内容も歌詞もかなり類似している。このことから、富山県の西と東、或いは南などほぼ全域にわたる宗教教化の影響が読み取れる。また、魚津においては、平成の時代にも『うおづ盆踊り唄—お蝶六かんや—』⁵¹⁾および『越中魚津の民謡 魚津せり込み蝶六保存会創立五十周年記念』⁵²⁾として「目蓮尊者地獄めぐり」が発刊されていることから、この故事が今日も息づいていることを知ることができる。なお、「蝶六」には先述したように「おちゃらけ話」という意味があり、また、せり込みには「口速」の意味がある⁵³⁾ほかに、当地では「音頭と踊り手がせりあって歌い踊る事、また踊り手同志が張り合って踊る事」⁵⁴⁾という理解もあるという。

刊行された上記二種の「目蓮尊者地獄めぐり」のうち、ここでは、後者を取り上げる。後者は、明治期に、ある寺院に保存されていたもので、少なくとも明治中期ごろの詞章であることがはっきりしているからである。現在は魚津歴史民俗博物館（元魚津民俗資料館）に保存されているというが未見（保存先調査中）。以下に唄の目的、地獄描写および梗概についてまとめる。

【第一段】「さてもこれから読み上げます 年の七月十五日にて、千部施餓鬼のさてその由来よくもつらづらたずねて見るに かつじけなくも釋迦牟尼如來 我等衆生をば再度（済度？）のために 此の世ばかりは八千余度 来向なされたその大願は 皆衆生の御爲で御座る 常に

49) 『富山県民謡緊急調査報告書』 pp.26-27。

50) 『富山県民謡緊急調査報告書』 pp.33

51) 山形隆幸編著魚津歴史同好会発行（1989）

52) 宮坂彦成編『うおづ盆踊り唄—お蝶六かんや—』（魚津せり込み蝶六保存会発行、2000）

53) 『日本庶民生活史料集成』「民間芸能」p453

54) 『うおづ盆踊り唄』 p10

御苦勞遊ばし給へ 有生無生を道引きなされ」と述べ、目蓮の由来および父について釈迦に尋ねる（父は原内国の長蓮様という大善人）。[第二段]母は女大不如という大悪人と知る。仏教を信じず悪口と我欲ばかり。地獄に落ちたと聞く。母の死と地獄への道は、「原内国にて第一番の女大不如と言う悪人じゃ 父の立置く九重の塔も 悪の心で切なくなる思い 花の時節の年春彼岸 秋の彼岸の中日やなどに 信の行者に相誘われて 御寺参りを致せし時も 後生心は少しも無しに あんな説法と聞く耳もたず 何のかんのと数難つけて あのと坊主の言はれる事も このや和尚の説かれる事も 皆うそじゃと悪口ばかり 僧の衣や御袈裟を見れば あんなきれいな衣や袈裟を 我子目蓮子供に着せて 子細ふらして眺めて見たや 欲しや欲しやの積重なれば 砂いさごも寄り集まりて 千尋たきだつ大磐石じゃ 糸を集めて大綱出来る 積もり積もりて罪盤石を かかる邪見の人々達も 寿命ばかりは免れ難し ついに三十二才の時に、激しい無常に相誘われて 闇の冥途へ落行きなさる…」[野辺の葬式送りをすれば 父の時とは天地のちがい 晴れた天気もたちまち曇り 天火稻妻やれ雷じゃ そのま中より鬼神が降りて 母を納めし棺桶破り 中の死骸をさてつかまんと 致す所を その日の導師 阿難尊者が仰天なさる 袈裟や衣を投げ掛け給い 袈裟の功德で死骸を捨てて 四寸四方の魂ばかり 業の炎を車に乗せて 死出の山坂涙で越える さてもこれから閻魔の前へ 閻魔大王がじっと見られ さても恐ろしこの罪人は 並や大抵の者ではないぞ 罪を作りし大悪人じゃ 業の深さを御覧のために 業の秤を取り寄せ給い 秤分銅は千人吊りの 岩を分銅にあそばした給い わずか小さい魂ばかり 四寸四方のふかまの中に かかる有様つくづく見れば 岩の分銅は中天までも 岩が軽くてさて飛び上がり 業の魂 大地に沈む そこで大王がよく御覧にて ほんに恐ろし此の罪人は 並や大抵の者ではないと 娑婆の姿をご覧のために うそを言われん浄玻璃鏡 彼の罪人これにて分かる 九万八千鱗を立てて 頭十二の角ふり上げて 火炎吹きだすその有様を 又は四角に八角眼 御覧なされてこの罪人は 罪の定めは八萬地獄 さらば獄卒呼び寄せられて 修羅の太鼓が打ちならされる 阿傍羅刹や獄卒共が 九丈二尺の鉄棒持って 山の崩れる如くに来たり 哀れなるかや さて恐ろしや 三の御弟子の目蓮様の 母の御側へ寄り集まりて 九丈二尺のあの鉄棒を 右の腕を左え通し 大王仰せの八萬地獄 落ちる事にはちがいがいと…」とある。[第三段]暇をもらい地獄巡りの旅装束 法華経・三部の御経・結文経（血盆経）、地才経（地藏経）をもって出発。3日間の地獄めぐりの暇を願うが如来からは百日百夜の暇をもらう。三途の川の苦難も読経して潜り抜け、また如来に命じられて大蛇に化けた兄弟子阿難の助けで無事通り過ぎる。[第四段]清水河原の偕姥御前（背丈十丈22の角、眼は百千鏡の如く、色は朱紅、髪の毛は針金の如く、手には九丈の鉄棒）は案内を願うも応ぜず。そこで目蓮は、妙法蓮華経、浄土三部経を読む。姥は聞き入れ、目蓮の母が着ていた肌着を目蓮に与え地獄の道を教える。剣峠、火降り峠、闇の峠、盤石峠を釈迦からもらった蓑と笠、そして光明遍照十方世界の念仏と四句の御文を唱えて何とか通

過。まもなく女人不産の地獄に到着。第五段続いて血の池地獄。広く深い地獄、橋があり落ちればそのまま地獄行き。目蓮は、結文（血盆）経を読誦し、南無阿弥陀仏と書いて血の池地獄に18枚投じると地獄が枯れて有罪無罪の人々が皆成仏した。また急いで母のいる八萬地獄の門に至る。目蓮は、南無阿弥陀仏と唱えて三遍書いて如来の神通力を願った。釋迦如来、藥師如来、觀音、本師法王、無量壽如来に礼拝し、鉄の門を開けた。しかし、紺屋地獄、鍛冶屋地獄、百姓地獄などを巡ると、大王がいて、九丈二尺の鉄棒をもち湯玉立つ地獄の中を回し、「此れや罪人獄卒ども」と三遍唱え左腕を左へさせば母に会える、と言う。そこに瘦せこけた母がいた。そこで血盆経を唱えようと湯玉も消え、地獄の深さも減り有罪重罪の人々は釜の縁に這い上がったが、母だけがなお沈んでいる。目蓮が母の名を呼び、手に持つ経で母を招き、釜から引きあげた。母から地獄の苦しさを聞き、目蓮は法華経と三部経の読誦で釜を割れば多数の罪人が出てきて悟を開く。しかし母はそのあまりの邪険さゆえにふたたび地獄に沈んでしまう。目蓮は釈迦如来の方便で救済してほしいと乞う。如来は目蓮に施餓鬼の供養をせよと言う。そこで供物や灯籠を釈迦の命の通りに準備し八万余人の弟子を集めて施餓鬼経を勤めれば、母は幽霊となり如来の前に現れる。目蓮は、母が成仏することを願ったが、弥陀に協立する觀音に封じ込められる。

このように、目蓮が困難を突破するに当たっては、第五段では妙法蓮華経、浄土三部経、結文経（血盆経）、地才経（地藏経）を念じている。また、第四段では「光明遍照十方世界」や四句の御文を唱えている。これらのことからみれば、当時の目蓮地獄巡りが唄われる「場」は、浄土真宗の信仰の促進であり、同時に血盆経と関係のある立山信仰の影響下にあったと思われる。

5. 目連故事の受容の相違—江南「目連三世宝卷」と魚津「目蓮尊者地獄巡り唄」を例に—

5.1 母はいかなる悪事をしたか

まとめに当たって、江南「目連三世宝卷」と魚津「目蓮尊者地獄巡り唄」との相違について考えてみたい。まずは「出だし」についてである。中国江南の「目連三世宝卷」には、3.1で述べたように、まず母の行った悪事が記されていた。母は、此界で、本来「看經念仏」に勤しんで仏教に帰依していたが、叔父の口車に乗り精進を解き飲酒食肉にふけったため、自ら地獄の門へ身を投じることになった。その際、此界から彼界への旅路などの記載はなく、母は「まだ願いを言い終わらないうちに、七つの穴（目・耳・鼻・口）から血を流し、その場に倒れて息絶えた。そこへ地獄の使いが現れ、母を生きたまま捕らえて引きずり出し、鉄の鎖で縛り上げた。牛頭が押さえつけ、馬面が手足をねじり上げて打ち据えたので、母の皮膚や肉は碎け、血がしたたり落ち、泣き叫ぶ声は痛ましく、まことに哀れな有様であった。」と、生きたまま

無残な姿で彼界へ旅立った。

対して、富山での「目蓮地獄巡り唄」は、「千部施餓鬼のさてその由来 よくもつらづら
たずねて見るに かたじけなくも 釈迦牟尼如来 我等衆生をば再⁵⁵⁾度のために…これはさて
おき 釈迦牟尼如来 お弟子ばかりは 八万余人…」(第一段)で始まり、神仏や社寺の由来
を説く説教節の「本地物」と同じく、釈迦牟尼如来の弟子の名が目蓮に至るまで「つらづら」
とうたわれていた。その後、彼界での父の善人ぶりが具体的供養の実践や公共事業への貢献な
どを示しながら称賛されていた。一方、母については、彼界において「女大不如」という悪人
となって信仰心がないことが記される。信仰心がないとは、具体的には、僧侶を信頼せず、そ
の人間性を批判することなど(「御寺参りを致せし時も 後生心は少しも無しに あんな説法
と聞く耳もたず 何のかんのと数難つけて あのや坊主の言われる事も このや和尚の説かれ
る事も 皆うそじゃと悪口ばかり」)を指している。同時に、僧侶が盛服を着ることへの嫉妬も、
「僧の衣や御袈裟を見れば あんなきれいな衣や袈裟を 我子目蓮 子供に着せて 子細ふら
して眺めて見たや」(第二段)と記されている。また、母の野辺送りについては、「晴れた
天気もたちまち曇り 天火稲妻やれ雷じゃ そのま中より鬼神が降りて 母を納めし棺桶破
り 中の死骸をさてつかまんと致す所を その日の導師 阿難尊者が仰天なさる 袈裟や衣を
投げ掛け給い 袈裟の功德で死骸を捨てて 四寸四方の魂ばかり 業の炎を車に乗せて 死出
の山坂涙で越える」(第二段)と、鬼神の暴虐のなか、かろうじて阿難尊者のおかげで亡魂の
みは死出の旅へと出ることができた、と記される。

以上、「目連三世宝卷」は、本来は敬虔な母が、叔父の口車に乗ったばかりに看經念仏を蔑
ろにした結果、地獄に引っ張られていくことになるというものであったが、「目蓮尊者地獄巡
り唄」は、主に僧侶に対する侮蔑と批判をしたことによって地獄に落ちたと記されている。前
者の叔父の口車に乗るという記述は、本来、母は悪人ではないことを示し、母を救済する必要
性を暗示しているといえよう。対して後者は、信仰心のない母への直接的批判と見ることがで
きよう。

5.2 地獄巡りの描写

中国江南の宝卷は、3.3の項で述べたように、阿鼻地獄(鉄圍城内)・鬼門関・孽鏡台・破
銭山・剥衣亭・寒水地獄・神鷄山・油鍋地獄・血湖池・滑油山・枉死城・鋸解地獄・刀山・惡
犬地獄・碓舂地獄・炮烙地獄・挨磨地獄・孟婆庄・奈何橋など多くの地獄が登場し、またなぜ
そこに行かなければならないのかという理由も明示されていた。それらの理由(悪事)は、「不
孝」「悪行」「吝嗇」「好色・道楽」「自私自利・殺生」「公共事業を行わない」「節操を守らず再
婚を繰り返す(女)」「口がうまく人を騙す」「嫉妬し親不孝(女)」「外道・仏に帰依しない」「戒

55)「再度」は「済度」か。

律違反」「姦淫」など俗世でよく見聞するものであり、悪事と地獄の因果関係は明確にうたわれている。また、地獄描写は、目連宝卷全体の中で最も紙幅が割かれる箇所であり、現世の罪状と来世の刑罰から、聞くものに恐怖心を起こさせて悔恨（戒悪作善）に導くことが背後に意図されていた。まさに「罪と科」という「因果応報」とそれによる教訓性が宝卷における地獄描写の特徴であった。

一方、宝卷に比して、「目蓮地獄巡り唄」は、地獄を客観的かつ羅列的に案内する。案内者は、清水河原の姥御前（奪衣婆）である。姥御前は目蓮の肌着を奪い取ろうと虎視眈々と狙っていたが、目蓮の読経によって案内をひき受けることになった。姥御前曰く、「さても此れから地獄の道を 教え申さんお聞きなされ 道の辛いは限りはないぞ 剣峠が百十丁 火降り峠が尚百十丁 闇の峠が又百十丁 盤石峠も尚百十丁 四百四十丁の難儀の峠 さても辛さが限りはないぞ ゆっくり巡りて御返り有れと 姥は言われてわかれて行けば 一人目蓮涙に暮れる 先の地獄へ急がれ給い さても程なく剣の峠…」(第四段)と。そこで、目蓮が目にした剣峠は「このや峠の様子を言えば 雨の如くに剣が降りて 足に踏むのも手にさわるのも 皆剣の峠で御座る」(第四段)、ついで火降り峠、盤石峠が「火降り峠の偕^{さて}そのつらさ 千の松明一度に寄せて 灯^{とも}せ如くに火が降ります または下から八万余句 火炎燃え立ちやれ恐ろしや」(第四段)「向かい給うが盤石峠 口に言われん難儀な事じゃ 雨やあられの偕降る如く」(第四段)と記され、その表現は客観的で羅列的かつ簡潔である。

注意すべきは、地獄の記述において、宝卷にはないキャラクターの清水河原の姥御前（奪衣婆）が登場している点である。奪衣婆の登場は女性と強くかかわる血の池地獄と関連しているようにも思われる。富山の立山信仰において、立山曼荼羅に姥堂が地獄の入り口とされて描かれる時に、血の池地獄が描かれることが多い。姥堂、奪衣婆、血盆経などの関連性についてはここでは言及せず、その一連の事情については別途考察してみたい。

5.3 血湖地獄の描写

さて、宝卷の血湖池は1.1で記したが、目連の母が目にした血湖地獄での苦しみは、「その湖から抜けようにも抜けることができず、裸のままで、身体は血の湖に浸され、皮膚が裂け、肉がただれていた」という悲惨なものであった。後に目連も血湖地獄を目にすることになるが、そこは「惟有人生造孽多 不修品行念弥陀 多貪酒色並財氣 不孝父母逆公婆（この世で罪を多く作り、品行を修めず阿弥陀仏を念じることせず、酒・色欲・財欲・怒りに貪り溺れ、父母に孝行せず、舅姑にも逆らう人。）」(22葉)が落ちる地獄であった。この酒、色、財、氣(怒り)、不孝(父母・舅姑への不敬)の五悪は、当時民間に行き渡っていた「女戒」や「善書」にも記される事項で、特定の思想や信仰に限られることのない社会規範であった。目連は五悪を耳にして10字74句の長い詞(22葉-24葉)で以下のように嘆く。「有目連歎血湖其中罪犯 都是那在陽間不好修行 為女子在家中嬌慣成性 不曉那女人家四德三從 只任己情性乖招非惹是 習

慣了古怪性闢氣紛争 幾句話不對頭撥天大鬧 蓬了頭赤了脚將命來拚（「目連は血の湖の罪人たちを見て嘆いた。ここに落ちている者らは、みな陽の世界で修行を怠った者らだ。とりわけ家の中で甘やかされて育ち、女性としての四徳・三従も弁えず、気分のままに振る舞っては、あれこれと災いを招き、気難しい性分ゆえに、すぐに怒って争い、少し言葉が気に入らないだけで、天を揺るがすほど大騒ぎし、髪を振り乱し、裸足で怒鳴り込み、命がけて喧嘩をする）」「嫁出門做媳婦丈夫不敬 逆公婆腦妯娌呪罵居隣 倘有事稍拂意尋死覓活 欺伯叔侮丈夫不顧品行 貪美味愛好衣塗脂抹粉 裝成了妖怪樣引誘他人 丟父母與公婆丈夫體面 花銀錢娶得你反辱家門（嫁いで夫の家に入っても、夫を敬わず、舅姑に逆らい、小姑と争い、隣近所を呪い罵り、少しでも気に入らないことがあれば、すぐに死ぬだの生きるだのと騒ぎ立て、伯父や叔父を欺き、夫を侮って行いを顧みず、美味しいものを貪り、煌びやかな衣服を好み、脂粉を塗りたくっては、まるで妖怪のような姿で他人を誘惑し、父母や舅姑、夫の面目を失わせ、銀子を払って嫁に迎えたのに、かえって家門を辱めるような者である。）」ここでは、やはり、日常の女性の行状が次々と語られていく。続いて、次に示すように、男性に対する戒めも記されている。「女人犯一切罪到此受苦 男子漢犯了罪一樣施行 一種人好吃酒不顧父母 約三朋施四友終日醺醺 酒醉後信口談胡言亂語 豈知道醉後話最易傷人 甚至于乘酒力將人打死 連累了一家人受怕担驚（女が罪を犯せば、ここ（血湖）で苦しみを受ける。男であっても罪を犯せば、同じように罰が下される。酒を飲むのを好み、父母を顧みず、三朋四友とつるんで一日中酔ってふらつき、酔えば口から出まかせを言い、乱暴な言葉を吐く者もいる。酔った時の言葉こそ、人を最も傷つけやすいことも知らず、さらには酒の勢いで人を殴り殺してしまい、一家の者まで恐怖と心労に巻き込んでしまう。」このように、血湖地獄とはいえ、女性に限ることなく、日常における男女双方の守るべき道德の側面が強く記されている。

一方、魚津の「目蓮地獄巡り唄」における血の池の描写はいかがであらうか。その「第五段」を見てみよう。「地獄数々有る其の中に 女人好まぬ血の池地獄 此処の広さは四萬と余旬 そのや地獄の向かいの岸に 清浄莊嚴浄土を飾り 数多獄卒寄り集まりて 此処の岸より向かいの岸へ 糸に勝りし橋をば掛けて 有罪重罪邪人の共が 行けよ走れよ向かいに見える あれが阿弥陀の浄土じゃ程に 越せよ越せよとお急ぎすれば 橋がぶつつり真中程で切れて落ちればそのまま地獄 なれど女衆は喜びなされ 娑婆にいる時 得果と言うて くしやかんざし頭にさして佛飾りを致した縁じゃ 女喜び首から上は 浮かび浮かんで苦しみ受けん そのや様子を目蓮尊者 御覧なされて涙を流し さても不憫の罪人共や 助け給えと笈をばおろし 女人助かる結文経を 御声殊勝に読誦なさり 笈の中から筆をば出して 口に南元佛南無阿弥陀仏 書いて直ぐ様 血の池地獄 祈り一枚投げ込み給い 直ぐに地獄が一丈へりて…都合三部六十八願で 南無の六字の功德によりて 有罪重罪罪人共は 皆成仏遂げたと云うぞ」と、女性の生前の悪事などは記されず、目蓮が結文経（血盆経）を読み、「南無阿弥陀仏」

と書いて折って一枚を「血の池地獄」に投げ込むと血の水は減っていき、ついに成仏した、とそのことのみが客観的に描写されている。「有罪重罪罪人共は 皆成仏遂げた」には、善人も悪人も全ての衆生は救われるという浄土宗の教えが反映されている。

5.4 母を救う理由—孝による救母か母子の情愛による救済か—

さて、目連、目蓮ともに最も重要な母の救済はどのような心情から生じているか。宝巻においては、「目連跪在塵埃地 哀告菩薩發善心 自古一兒皈佛道 從來九族盡超生 只因養育恩情大 尋母擔經見世尊 佛祖念余功行滿 指教尋母到幽冥 賜吾衣鉢禪和杖 可截泥犁救母親（目連は塵にまみれた地面にひざまずき、菩薩に向かって哀願した。昔から、子がひとり仏門に帰依すれば、その九族までも皆、救われると申します。育ての恩はこの身に深く、どうしても母を救いたいです。どうか、私の願いをお聞き届けください。母を探し求めて経を担ぎ、世尊様にお会いしました。すると仏祖様は、私の修行が満ちたことを思い、冥界へ母を探しに行くようお示しくださったのです。そして、衣鉢と禅僧の杖を受けられ、この杖で泥犁（地獄）を突けば、母を救える、と教えてくださったのです。」（38葉）。目連は母に対して「育ての恩」があるので母を救いたいと訴える。その恩返しこそは儒教の根本教義の一つ「孝」であり、3.3で示した「一重恩」から始まる母への思いと一致する。

片や、目蓮地獄巡り唄においては、「（目蓮が経で母を呼ぶと母は地獄の釜の縁へ上がって来た。）よって目蓮 母人様の御手をしっかり手に取り給い 釜の中より引き上げなさる 偈も愛しの母さんよ 偈もなつかし目蓮かいな 涙ぼるぼろ対面なさる 偈も母上なつかしき事 お釈迦様には言い訳たたん 一家眷属なをなを笑止 なれど目蓮よう来てくれた さらば母様この目蓮は 貴女一人に逢いたいばかり 難所忍んでたずねて来たが 何卒母様 地獄の責めをしばし語りて御聞かせ願う」「第5段」とあり、目蓮の母に対する感情は「愛し」「貴女一人に逢いたいばかり」と記され、母もまた「なつかし」「なみだぼろぼろ」と、その感情は母子ともに「情愛」が主たるものであるといえよう。浄土宗や浄土真宗では、悪人正機という考えの中で、誰もが阿弥陀仏に救われるということから、前世の悪行に対する刑罰の提示や孝の強調の必要性は乏しく、それゆえ、母子の情愛という点を前面に出したのであろうか。

5.5 いかにして母を救い出したか—禅杖を手自力で地獄に乗り込み門を打ち破る目連と法華経、浄土三部経、血盆経の読誦の功德で母を救う目蓮—

宝巻における目連の地獄巡りは、困難に遭遇した時、自らの力に頼ることが多い。以下に記すように、力の限りを使って母親を救済する姿が描かれる。「目連問道、有個劉氏在內廄、鬼使說在內廄、目連聽見在內、手執禪前杖向獄門上用力一戳。猶如天崩地裂。訥喇一响地獄門大開。裏邊衆孤魂只說道、開恩大赦猶如雁飛一船出來。目連只是尋母、不顧鬼魂逃走、把守獄門的鬼使不放目連進去。（目連が鬼使に尋ねた。「ここに劉という姓の者はいるか」 鬼使は答えた。「中にいる」その言葉を聞くと、目連は手にした杖で獄門を力いっぱい突いた。すると、まる

で天が崩れ、地が裂けるような轟音がして、ドンと一声、地獄の門が開いた。「恩赦だ」と叫びながら、雁が一斉に飛び立つように、どっと外へ押し出してきた。しかし目連は母を探すことだけに心を傾け、逃げ出す鬼魂たちには目もくれず、獄門を守る鬼使を押しつけて中へ進んだ。』(37葉)

一方、魚津の目蓮地獄巡りでは、「妙法蓮華經」や「浄土三部經」などの念經によって、或いは釈迦牟尼如来へ助力を乞うことによって難を逃れることになる。例えば清水の河原では、「あまた御經をば取り出し給い 一番先には妙法蓮華 つぎに浄土の三部の御經 ^{あまた}数の經文 刹那のうちに 御声たかだか 御読みになれば 經の功德の殊勝によりて いかな姥でも合掌致し 佛御弟子の目連様よ 姥がただ今 過言の一儀 平に御免を下され給い…」(「第四段」)、或いは、血の池地獄では「女人助かる結文經を御声殊勝に読誦なさり笈の中から筆をば出して 口に南元佛南無阿弥陀仏…」(「第五段」)と見える。また、各所に「(姥に)涙ながらに お願いすれば」「どうぞ大王ご慈悲をもって」「如何に御師匠釈迦牟尼如来 如何にご慈悲の御かげによりて」(「第五段」)など、浄土真宗の影響と思われる他力本願による救済が記されている。

以上、中国と日本とでは、それぞれ同一の故事に基づく目連宝卷と目蓮地獄巡り唄があり、その物語の枠組みは大きくは異ならなかったものの、描かれた宗教観や母子の情、或いは地獄観は異なっていた。それは、前者が、地獄描写によって恐怖心を抱かせて道德教化へと導くことを目的とし、多くは廟内や個人の家内で行われるのに対して、後者は、大衆の信仰を一層進めることを促すことが目的であり、娯楽的色彩をもつ盆踊りの中でうたわたれるという、両者の目的や場(環境)の相違に起因するからであると考えられる。

小論は、2024～2026年度・科学研究費補助金「中国民間講唱文藝研究—語りの「場」から考える—」(基盤研究C)研究課題番号24K03696研究代表者:松家 裕子)の研究成果である。

